岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（13）

楢原廃寺跡緊急発掘調査概報

1 9 7 6 年 3 月

岡 山 県 教 育 委 員 会

文 化 課

序　　文

美作地方における寺院址の調査は，中国縦貫自動車道建設によって行われた久米廃寺址の例があります。この久米廃寺址は，道路公団との協議により部分的にしろ保護をはかってきました。

楢原廃寺址は，美作町の中国縦貫自動車道の美作インターチェンジの北東1km程の所に存しています。この寺院址周辺にも開発，あるいは圃場整備事業が近く行われようとしているため，県教育委員会ではこの寺院址の寺域，建物配置などをあらかじめつかむ目的で国の補助を得て調査を行ったものであります。

今回のトレンチ調査により，楢原廃寺の規模等もある程度はっきりし，また英田郡内，ひいては，美作地方の寺院址の保存に役立たすとともに，一つの研究資料として活用していただければ幸甚に存じます。

最後に調査にあたって文化庁，奈良国立文化財研究所，美作町，美作町教育委員会をはじめ学識経験者各位から支援と助力を得た。また，心よく承諾をいただいた地元地権者の方々に対し，末筆ながら厚くお礼申しあげます。

昭和51年3月

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

文　化　課

目　　次

序　　文 …… 1

例　　言 …… 3
付　調査委員会会則，委員，調査団名簿

1．発掘調査の概略 …… 9

2．美作地方における寺院址の分布について …… 19

1）五反廃寺址 …… 20

2）久米廃寺址 …… 21

3）弓削廃寺址 …… 21

4）夜半廃寺址 …… 22

5）江見廃寺址 …… 22

6）竹田廃寺址 …… 22

7）土居廃寺址 …… 22

8）大海廃寺址 …… 23

9）長大寺址 …… 23

3．美作分国について …… 25

4．あとがき …… 26

例　　言

1．この報告は，岡山県教育委員会が国庫補助（3,000千円）を受け，楢原廃寺緊急発掘調査委員会に調査を委託し，その報告にもとづいた発掘調査の概要である。

2．発掘調査は，楢原廃寺発掘調査団が担当し，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長　横山浩一，同平城宮跡発掘調査部考古第3室長　森郁夫両氏の指導助言を受けた。また美作町教育委員会の藤生一郎氏をはじめ職員諸氏，美作町文化財保護委員会委員長　内海挙一，楢原中部落総代，高田恵人両氏には，発掘調査作業を始め諸々の面で絶大なる援助を受けた。発掘作業は，楢原上・中の地権者を中心に，流王俊雄，竹森静雄，宮阪強，宮阪肇，松本半一，松本住雄，竹森光雄，藤本正夫，小林喜代太，内藤勝，伊東隆，竹森謙二，竹森護，浅野昭三，宮阪富志夫，内藤まつ子宮阪かずえ，宮阪愛子，宮阪梅野，松本千恵子，松本桃代，竹森日江，安東八重子，岡阪素子，古川愛子，岡本照子，安東絹子，中沢ふじ，西崎わよ，伊東とみよ，古川あさの，藤本里子，安東さちえ，安東芳子の諸氏に寒中お世話になった。又西川つるよ宅でも色々とご迷惑をかけた。

記して感謝の意を表したい。

3．レベルの数値は海抜高である。これは中国縦貫自動車道建設時に用いられたベンチマークより引き出したものである。

4．トレンチは，寺址の仮主軸を任意の地点の磁北に求め設定した。調査は，トレンチ調査を主体に埋め戻し作業も含めて，１９７５年１２月１６日から７６年３月２０日まで実質約７０日間行ったものである。

5．この概要報告書の作成には，主に調査を担当した栗野・伊藤があたり，編集は，伊藤が行った。他に調査に参加した中野雅美，遺物整理・整図等において柳瀬昭彦，江見正己の援助を受けた。

楢原廃寺緊急発掘調査委員会会則

（設　　置）

第1条　楢原廃寺緊急発掘調査を実施するため，楢原廃寺緊急発掘調査委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（目　　的）

第2条　委員会は，岡山県英田郡美作町楢原中に存する，楢原廃寺の寺域及び主要遺構の性格を把握することを目的とする。

（事　　業）

第3条　委員会は，前条の目的を達成するため，次の事業を行なう。

(1)　楢原廃寺等の文化財の調査研究および保存方法に関すること。

(2)　その他，目的を達するために必要な事業。

（組　　織）

第4条　委員会の委員は，次の各号に掲げる者のうちから岡山県教育委員会教育長が委嘱する。

(1)　学識経験者

(2)　美作町文化財保護委員

(3)　関係行政機関職員

(4)　調査予定区域関係者

（委　員　長）

第5条　委員会に，次のとおり委員長および副委員長を置く。

(1)　委員長　　1名

(2)　副委員長　　2名

2．委員長は，岡山県教育委員会教育次長をもってあてる。副委員長は委員のうちから委員長が委嘱する。

3．委員長は，委員会を代表し会務を掌理する。

4．副委員長は委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，あらかじめ委員長が指名する副委員長がその職務を代理する。

（任　　期）

第6条　委員の任期は，調査が完了するまでとする。ただし，それぞれの機関等の代表たる委員は，その役職に存する期間に限るものとする。

（会　　議）

第７条　委員会は，委員長が招集する。

２．委員会は，次の事項について審議する。

(1)　会則の制定および改発に関すること。

(2)　調査及び保存等の基本方針に関すること。

(3)　その他，重要な事項

（事　務　局）

第８条　委員会の事務を処理するため，岡山県教育庁文化課に事務局を置く。

２．事務局員は，委員長が委嘱する。

（監　　査）

第９条　委員会に会計監査を実施するために監事を置き，その監事は，委員長が委嘱する。

（調　査　団）

第10条　委員会に，発掘調査とその他の事業を専門的に実施するため，調査団を置き，その調査員は岡山県教育委員会教育長が委嘱する。

２．調査団に，団長を置く。

（補　　足）

第11条　この会則に定めるもののほか，委員会の運営に関して必要な事項は委員会が定める。

附　　則

この会則は昭和５０年１２月９日から実施する。

楢原廃寺緊急発掘調査委員会

役名	氏名	所属
委員長	岡田政敏	県教育委員会教育次長
副委員長	綱島要	美作町教委教育長
	鎌木義昌	岡山県文化財専門委員
委員	横山浩一	埋蔵文化財センター長
	鎌木義昌	岡山県文化財専門委員
	水内昌康	〃
	小林孝男	県教育庁文化課長
	富岡敬之	〃 参事
	西口秀俊	〃 〃
	角幹	美作町議会総務委員長
	山本亀幸	美作町助役
	藤生一郎	〃 教委社会教育係長
	内海挙一	〃 文化財保護委員長
	高田恵人	楢原中部落総代
	竹森静雄	地権者代表
事務局長	小林孝男	県教育庁文化課長
事務次長	西口秀俊	〃 参事
	藤生一郎	美作町教委社会教育係長
	水田稔	県教育庁文化課主幹
	光吉勝彦	〃 主任

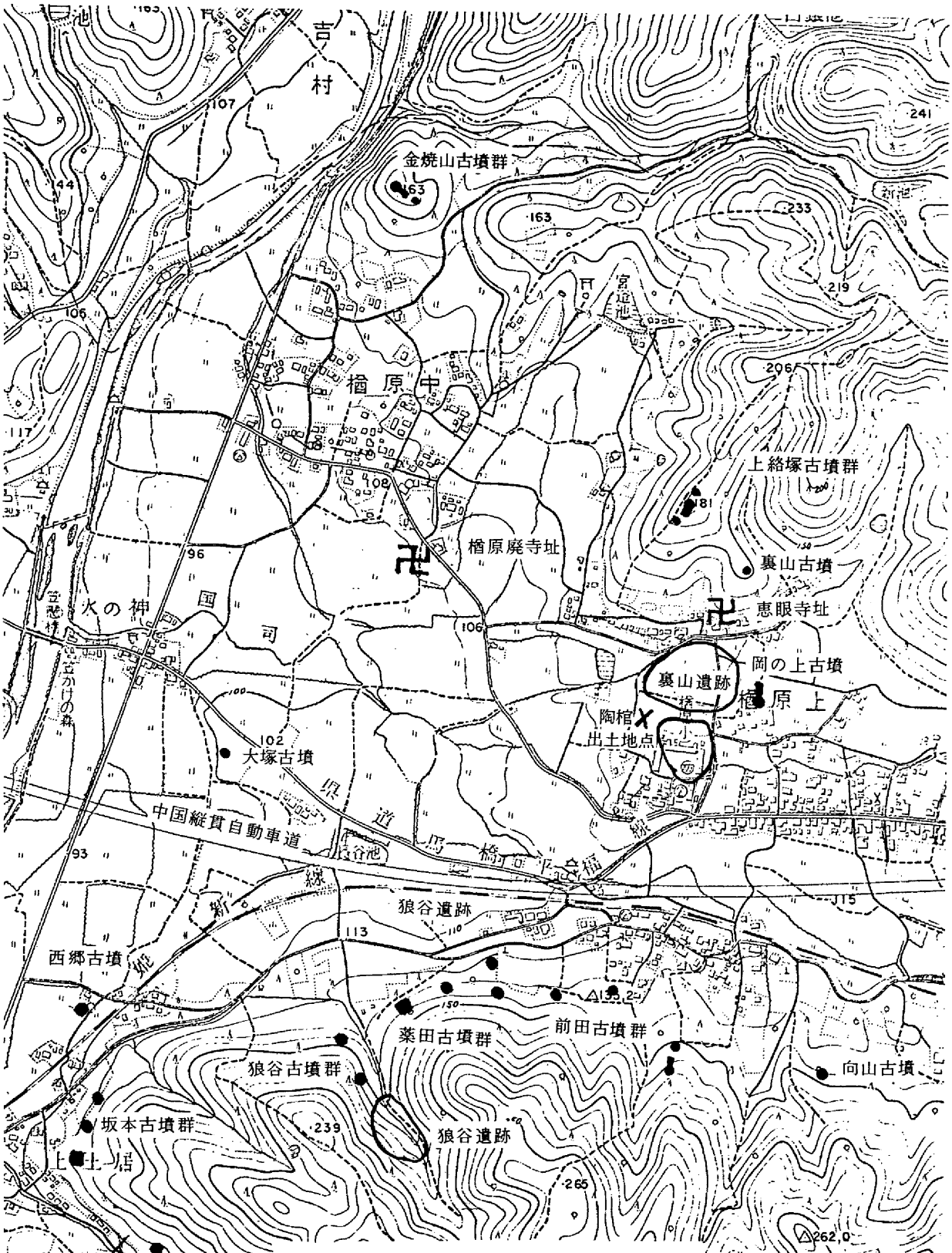
監　事	生田寿一	県教育庁総務課参事
	小林勇作	美作町総務課長

調査団

調査団長	鎌木義昌	岡山県文化財専門委員
	鎌木義昌	〃
	水内昌康	〃
	葛原克人	県教育庁文化課交化財保護主事
	伊藤　晃	〃　〃
	栗野克己	〃　〃
	山磨康平	〃　〃

（注）　副委員長1名は，岡山県文化財専門委員の委員が互選して決定する。

調査団長は，岡山県文化財専門委員の調査員が互選して決定する。決定時期はいずれも第1回調査委員会において決定する。



第1図　楢原廃寺周辺地形図

1. 発掘調査の概略

1) 楢原廃寺の位置

楢原廃寺址は，英田郡美作町楢原中に存し，吉井川の一支流梶並川の左岸丘陵上に位置している。かって農地の地下げ作業などで古瓦，須恵器片などが出土し，楢原廃寺址あるいは城南寺址と呼ばれ，小字名にも寺地（てらじ），叶田（かのうだ）など寺と関係するような字名が残っている。その名残りとも考えられる薬師堂が寺域の一角に残され，この建物の基礎に礎石と考えられる1m程の大きな石が4個使用されている。

2) 発掘調査区の設定

薬師堂に残された4個の礎石が動かされているにせよ建物の一つが，この周辺に存するものと考え，この堂から約10m東に仮主軸を磁北に求めて，寺域と想定した一町四方内にトレンチを設定した。

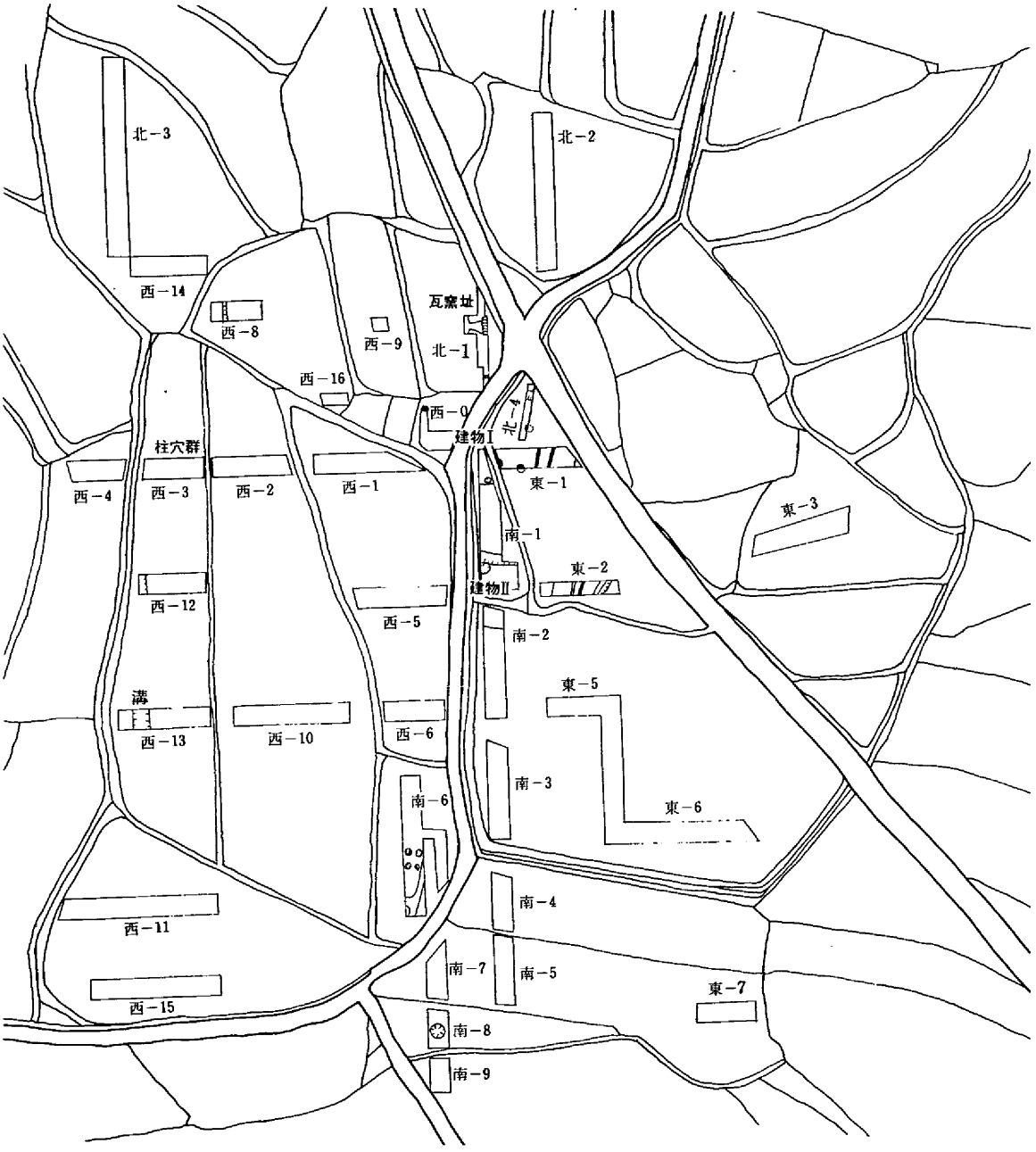
トレンチは，田畑ごとに設定し，畦畔を切ることをさけ，最終的には，東西12本，南北20本のトレンチを設定し，建物，寺域などの確認を行った。

3) 建　物 Ⅰ

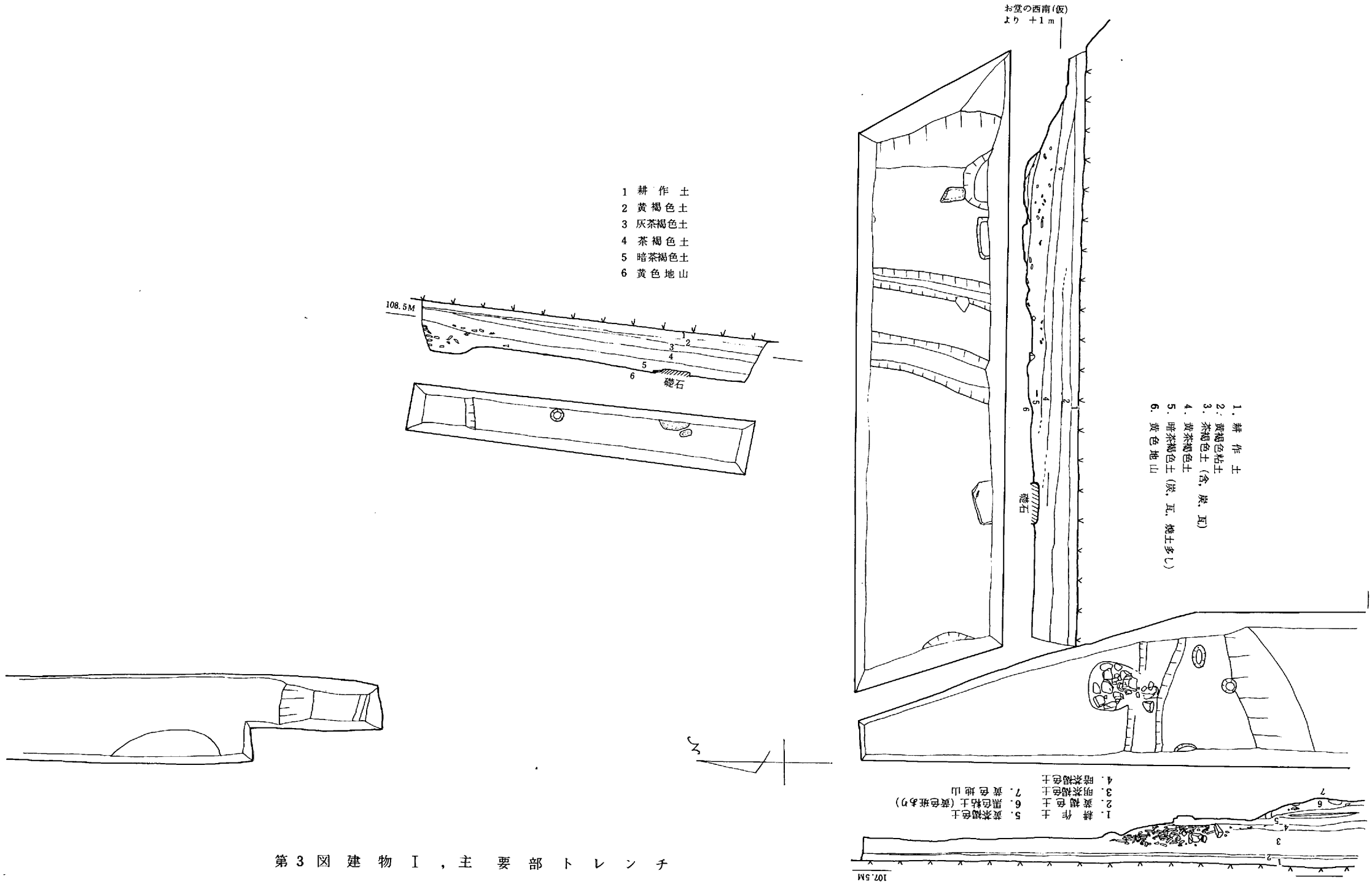
南$_1$トレンチにおいて二つの建物の基壇と，それに伴う大溝（これは両建物間の境溝になる。）を検出し，北側の建物をⅠ，南側の建物をⅡと仮称して調査を進めた。

建物Ⅰは，南$_1$トレンチにおいて，建物南側の基壇端と，根石のみが残った礎石抜き取り穴1個を検出し，東$_1$，北$_4$トレンチにおいては，原位置を保った礎石各1，東$_1$トレンチ東側に建物Ⅰの東限と考えられる小溝2本，また，北$_1$，北$_4$トレンチ内において，基壇北端および北側溝を検出した。これらにより，この建物は，基壇幅東西推定30m（100尺），南北15m（50尺），上に東西5間×南北4間の建物が想定される。

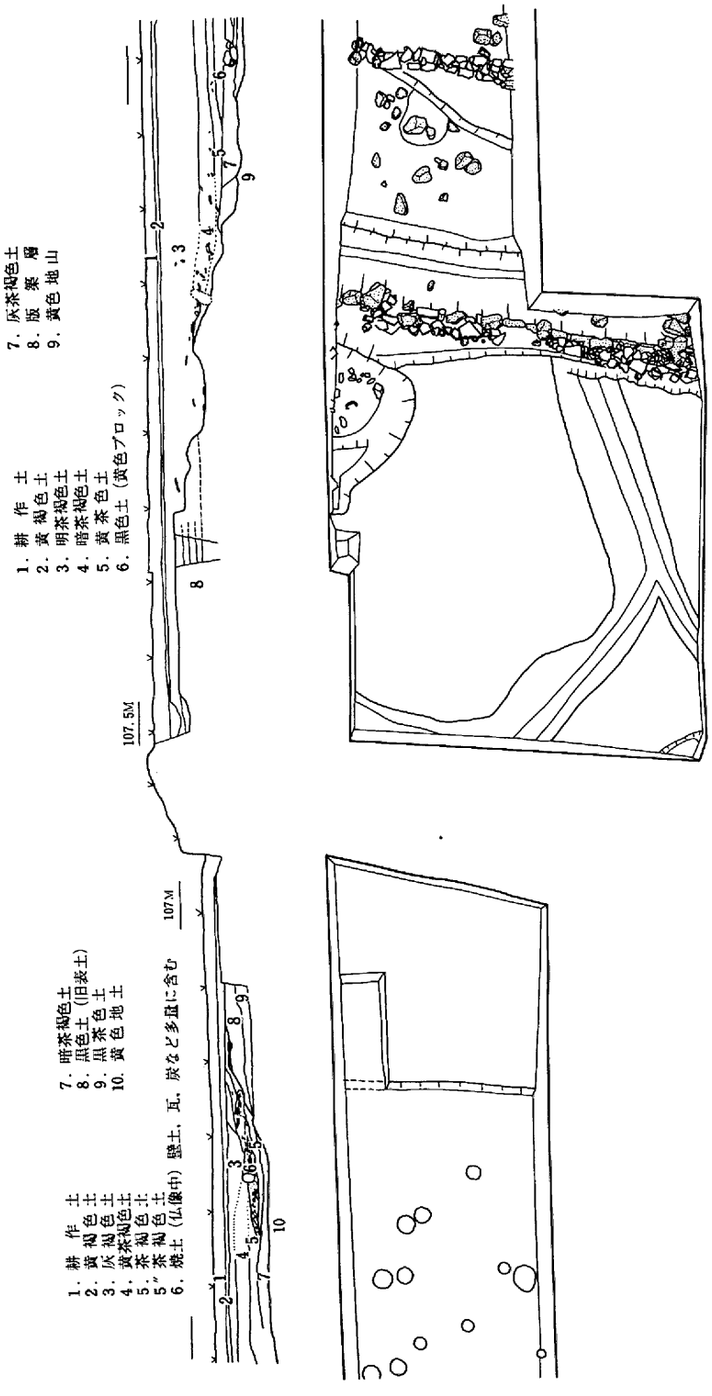
東側は，建物Ⅰを建てるため深さ約1m程地山を削平し平担面を造っている。南$_1$トレンチ内の基壇面は版築を行っておらず，黄褐色へ黄白色の地山面が基壇になっている。西側に低くなっており版築を行っているかも知れない。西$_1$，西$_5$トレンチでは，現水田面ですでに建物Ⅰ，Ⅱ間の大溝底部とほとんど同じ位まで地下げが行われており確認できなかった。

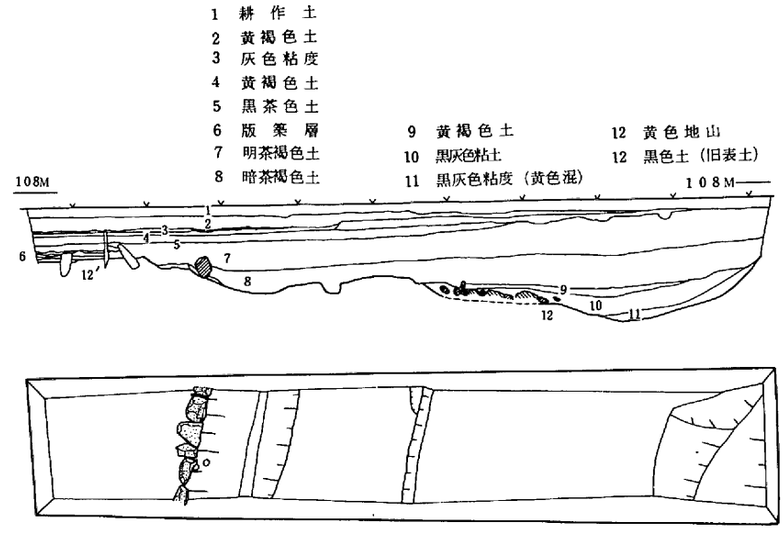


第２図　橋原廃寺地籍図およびトレンチ配置図（縮尺１／1,000）



第3図 建 物 I，主 要 部 ト レ ン チ





第4図　建　物Ⅱ　主要トレンチ

4） 建　物 Ⅱ

南$_1$ トレンチにおいて大溝をはさんで建物Ⅰの南側に別の瓦堆積および基壇北端が，南$_2$ トレンチにおいて南端を確認したため，南$_1$ トレンチの南側の基壇上面部分を拡大し，また，東$_6$ トレンチを設定し，東限界の確認を行った。

これらの結果，西側は建物Ⅰと同じく地下げが行われており確認できなかったが，基壇幅東西10.5 m（35尺），南北10.5 m（35尺）のほぼ方形の基壇が想定でき，基壇は基部に50cm前後の石を列べてその上に石，瓦をつめている。

発掘区内においては，礎石は残存していなかったが，1ヶ所，根石状の石を持った礎石抜き取りと思われる穴が確認できた。

この基壇はほとんど全面に現状で約70cm版築を残している。建物Ⅰの南端からこの建物の北端までは約 10.5 mを計ることができる。北および東側には溝を伴っている。南側はわずかに砂層がみられたが，西側は確認できていない。

南基壇南側では，焼土魂，壁土などに混って仏像片や螺髪が10数個出土している。

基壇基部石列の方向からこの建物は磁北より真北に近い。

5） その他のトレンチにおける遺構の概要

西－3トレンチ －西$_3$トンンチからは一つのまとまりを持つと思われる直径30cm前後の堀り方を持つ柱穴群を確認したが，規模，性格などについては追求できていない。

南－6トレンチ －溝状遺構，直径1 m前後の堀り方内に根石状の石，瓦をつめた堀り方を4個検出したがまとまりは明確でない。

西－12，13トレンチ －南北方向に走る溝状の遺構を検出した。西$_{13}$のは上部が削平され基底部のみで幅1.5 m，深さ60cmである。西$_{12}$は，東側肩部のみであり，深さは40cm程残っている。

西－8トレンチ －溝状遺構を検出しているが，これも東側肩部のみであり，西$_{12}$，$_{13}$トレンチの溝状遺構とは直線を異にしているので東側に一つの基壇が存するのかも知れない。

西－11，15トレンチ －柱穴群，炉址などを検出しているが，柱穴群も大小，深浅がありまとまりがついていない。

南－3，南－4，南－5，南－7，南－8トレンチ －南$_2$ トレンチより南に設定したこれらのトレンチ内においては，南-$_8$トレンチにおいて直径 1.5m，深さ50cmのすり鉢状の円形堀り方が見られた他は遺構は確認されていない。

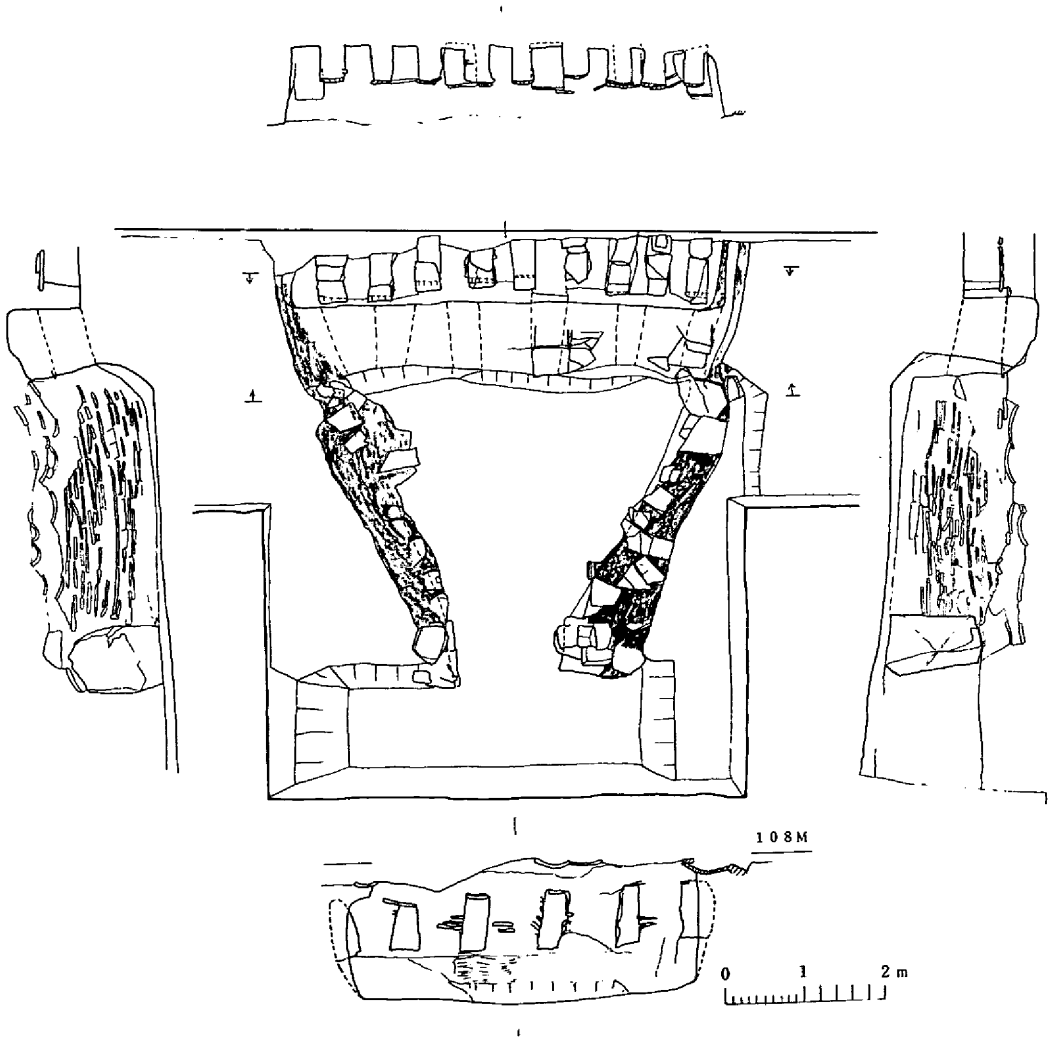
東－4，東－5，東南1トレンチ －このトレンチを設定した田は，かってぶどうがつくられ，深さ1 m近くまで深耕されており，遺構はほとんど確認できなかったが，東－$_5$トレンチの東端に溝状の遺

構が確認されたので，東－$_6$ トレンチを設定し，南北に伸びるものかどうかを確認したが，東－$_6$ 内においては確認されなかった。

北－3，東－3トレンチ からは，耕土直下に地山が検出され，東－$_4$ の東端部は東側に入り込んだ谷の一部と考えられる自然の落ち込みを検出し，少量の弥生式土器片が含まれている。

北－3，西－14トレンチは，西あるいは南に下る傾斜面にあたり，西－$_{14}$ では，瓦，礫を含む堆積層がみられた。

6） 瓦 窯 址



第5図 北－2トレンチ瓦窯址

北一$_1$トレンチにおいて瓦窯址の一部を検出した。これは，ロストル式の平窯で，燃焼室は平面逆台型になり，焚口部での幅７０cm，奥部では３m 近くになる。高さは約１m で天井部まではほぼ垂直に立ち，天井部はほとんど残存していなかったが，アーチ状に瓦と粘土でつくっている。また，焚口部には，２個の大きな石を立て，両壁は瓦と粘土を交互に約１m の高さまで積みあげている。

燃焼室と焼成室の間には約５０cmの壁をもうけ，その間に６個の３０cm×５０cm前後の炎穴を燃焼室床面より７０cm高い所に設け，燃焼室の炎を焼成室に導くようになっている。焼成室は燃焼室より９０cm高く（凹部で），焼成室は，幅３m，長さは４０cm程しか調査ができていないが横幅とほとんど変らないものと考えられる。内部は，粘土あるいは瓦で幅２０cm，高さ３０cmの凸部を９列つくり，その凸基部と凸基部の上部に瓦と列べれば，燃焼室から通じる炎穴から凹部を炎が二手に別れ炎の調整がうまくとれるように造られている。時期は別にして同様の窯址は最近の調査における幡多廃寺，および占見廃寺[註1]の近くでも検出されている。瓦窯址からの出土瓦は新しい時期のものは含まれていない。しかし，築窯[註2]に使用されている瓦は創建当時の瓦を使っており，奈良時代後半期以降に築窯されたものと考えられる。

７）　出　土　遺　物

出土遺物のほとんどは瓦類であるが，弥生時代中期の土器片，須恵器，土師器，青磁，鉄器（釘がほとんどである）なども出土している。南$_2$トレンチの建物II基壇南の焼土塊，壁土などに混入した形で如来像の衲衣部分，螺髪が合せ２０点近く出土している。

軒丸瓦は，奈良時代前半期，白鳳期と考えられる複葉７弁蓮華文が３種，差し変え瓦と考えられる奈良終末～平安時代の複弁７弁蓮華文２種の２型式５種が出土している。

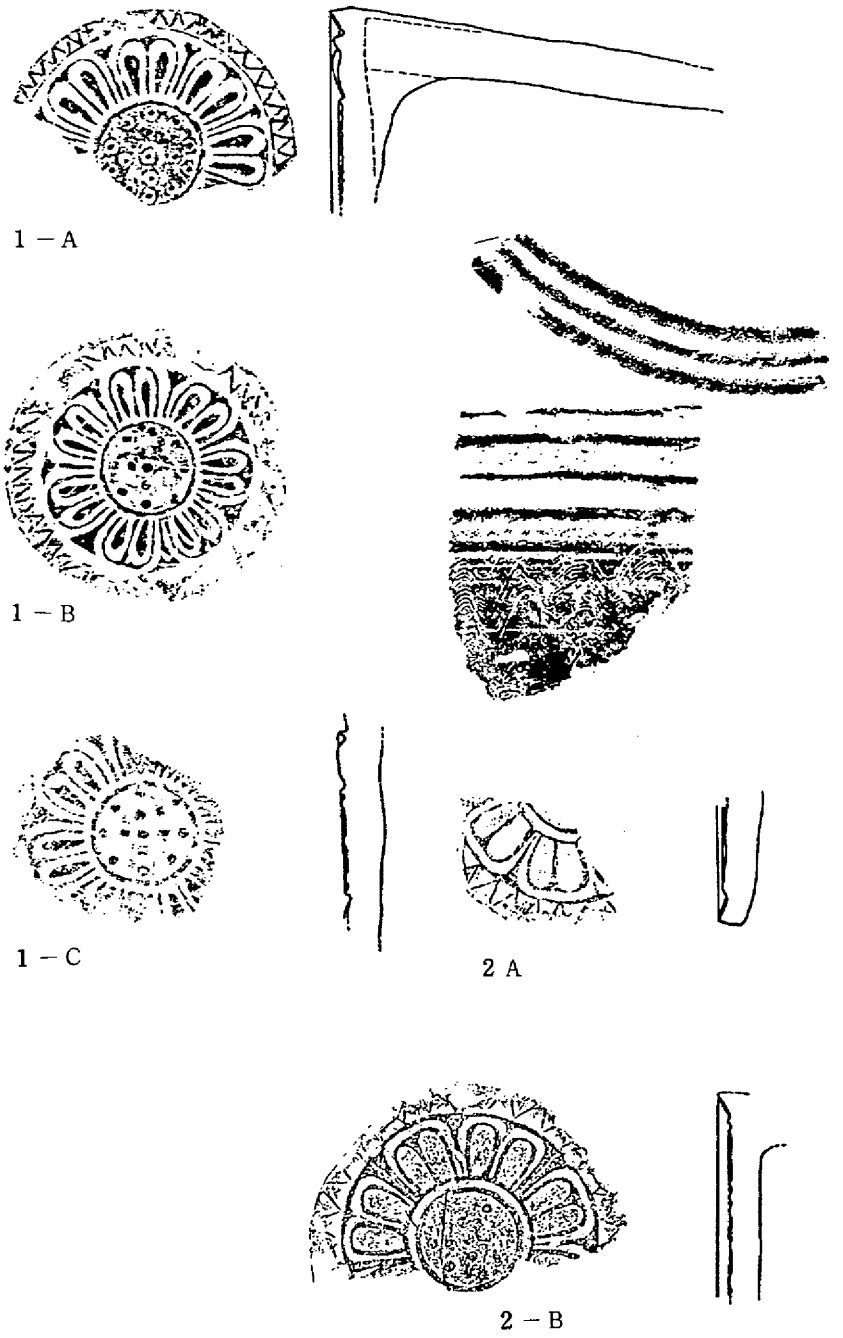
１）Ａは，複弁７葉蓮華文，蓮子は１＋４＋１０，外縁は線鋸歯文である。１）Ｂ，１）Ｃもほとんど１）Ａと同じであるか内区中房蓮子が１　)－Ｂは，１＋４＋８，１）Ｃは，１＋５＋８の相異が見られる。土居廃寺に１)Ｂの同笵が見られる。江見廃寺はどれにあたるか判明しないが，３種の内どれか１種である。

２）Ａは複弁７葉蓮華文を凸線でつくっている。蓮子は１＋４＋８，外縁は線鋸歯文である。

２）ＢはＡとほとんど同じであるが，複弁と単弁を２個合せた複弁を交互にあしらっている。

軒平瓦は三重孤文で裏面は３本の凸帯と１１本の波状文様を２条施している。また，軒平瓦と平瓦の角切り瓦，面戸瓦が数点出土している。

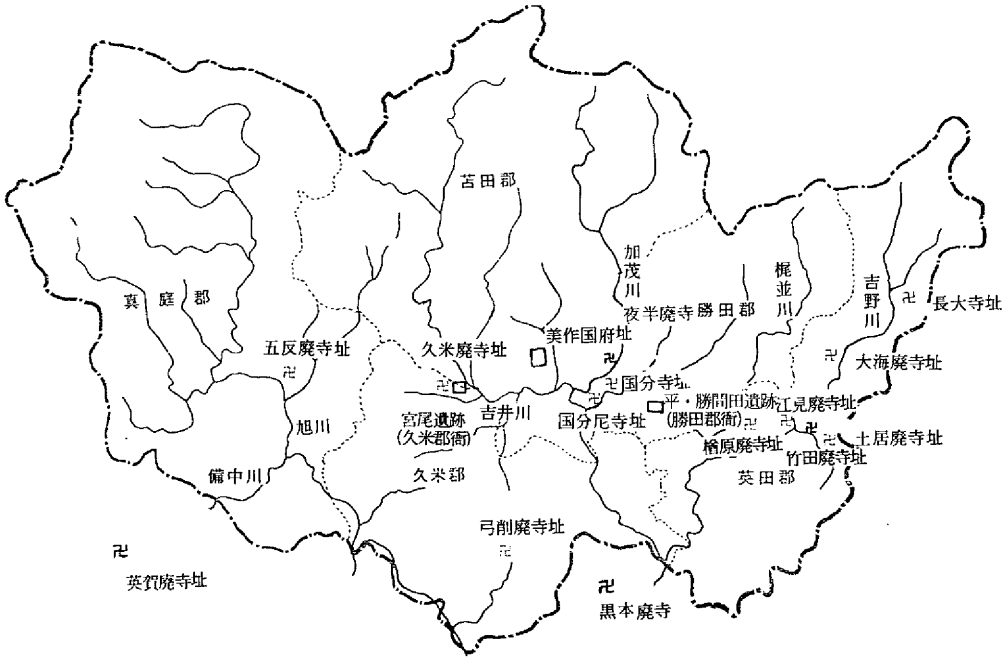
瓦類は主に建物Ｉ，IIの瓦溜り，西－$_3$トレンチ，瓦窯址からであるが，瓦窯址内からのはほとんど二次的に火を受けている。灰原はごく一部しか調査を行っていない。焚口周辺から出土した瓦も新しい瓦は含まれていない。しかし，建立時の瓦を利用して築窯されており，差し変えの瓦を焼成していると考えられる。



第6図　楢原廃寺出土瓦

2，　美作における寺院址の分布について

備前北部，美作地域六郡（大庭・真嶋・久米・苫田・勝田・英田（多））において寺院址あるいは古瓦の出土する場所は20数ヶ所知られている。しかし，考古学的に発掘調査の行われたものは土木工事などに伴なって部分的に実施されたものを含めて6ヶ所を数える。あとは今回報告した楢原廃寺の寺域確認調査以外にない。



第7図　美作地方奈良時代寺院分布図

美作地方における寺院址等の研究は，戦前において故永山卯三郎の「岡山県通史」（１９３０）がその代表的なものであり，美作地方の寺院址１１ヶ所の概要を述べている。また，戦前に作成された郡史あるいは，市町村史などにも寺院址に関する断片的な記載をみることができる。

一方，戦後においては，西川宏によって「吉備地方古瓦発見地名表」（古代吉備－第２集－１９５８）[註－3]において美作地方の瓦等の出土する地点（２１ヶ所）が一覧表にされ基礎的な仕事がなされた。また間壁葭子によって，「官寺と私寺」（古代の日本４・中国・四国・角川書店１９７０）。間壁忠彦，間壁葭子による「吉備王国の謎」（徳間書房，１９７２）。また西川宏による「吉備国」（学生社，１９７５）などが著わされ，美作地方の寺院址の概略が述べられている。

近年，この地方において，中国縦貫高速自道車道の建設，それに伴なう大規模開発，あるいはそれらの関連工事等々により，美作地方周知の美作国府，久米廃寺，江見廃寺等の発掘調査が行われ[註－4]さらに，久米郡衙，あるいは勝田郡衙と想定される場所の発掘調査が実施され，遺構の規模や構造についても新しい知見が加わりつつある。また，これらの新資料を加えた形で[註－5]津山市教育委員会により「津山市史」（第一巻原始・古代－１９７２）が刊行され，今井堯が「原始社会から古代国家の成立へ」を，三好基之が「律令時代」を津山市内に限らず，美作地方全体の原始古代史を論述している。また，久世町教育委員会よって「久世町史」（１９６５）が刊行され，松本和男等によって「久世の夜明け」の中で五反廃寺址の基礎的資料が報告され，地域史の諸々の問題点の解明に努力している。

ここでは，これらの諸成果をふまえながらそれぞれの奈良時代に含まれる寺院址，および出土瓦などを中心に紹介し検討を試みてみたい。

１）　五　反　廃　寺

真庭郡久世町大字三崎字五反に存し，大庭廃寺とも呼ばれている。

旭川東岸低位段丘上に位置し，寺域の規模は一町四方前後が考えられる。建物の配置等は不明であるが，寺域と考えられる場所からは，礎石，鴟尾，瓦類が数多く出土している。

４型式７種の軒丸瓦，６種類の軒平瓦が，田畑の耕作時などに出土している。松本の説明を参照しながら記述すれば，軒丸瓦の１）Ａ～Ｃは重弁８弁蓮華文，蓮子は１＋６，外縁は平担な素縁である。２）は，複弁８弁蓮華文[註－6]，蓮子は１＋６，外縁は平担な素縁である。３）は，単弁１１弁の外側に持異な文様を形取っている。蓮子は１＋６，外縁は平担な素縁である。４）は，３）と同じく単弁１１弁であるが少し大型でその外区はさらに小さな弁を１３弁つくり，それぞれを二つの木葉状でつないでいる。蓮子は１＋６，外縁は平担な素縁である。５）は，非常に細い単弁32弁で，その外側に４重圏をめぐらしそれを16に区切っている。蓮子は１＋８である。６）は，単弁10弁を線でつくっている。中房の蓮子はみられない。

軒平瓦は，扁行唐草文を中心に6種出土しているが，軒丸瓦のどれと組み合うのか明らかでない。

松本の報告によれば，3），4），5）の軒丸瓦は平安時代に降ると考えられている。しかし，これらの瓦は文様構成，瓦当面と丸瓦部分の接合方法等々から見て，少なくとも奈良時代前半期に溯らせてもいいのではないかと思われる。

以上のように，最も古い出土瓦が創建の時期を表すとすれば，五反廃寺の創建は奈良時代前半期（白鳳期）と考えることができ，平安時代後半まで存続していたことがうかがえる。3），4），5）の軒丸瓦は非常に特異なもので他の寺院址では全くその類例を探すことができない。そして，これらは高句麗出土の瓦と似ている所から，高句麗系瓦とも称されている。

五反廃寺は，美作地方においては最西端に位置する立地条件を占めている。旭川西岸の美作地域において奈良時代の寺院址は現在までの所確認されていない。旭川西岸には，旭川の一支流備中川南岸に備中国最北端に位置する英賀（あが）廃寺（上房町北房町英賀）が存しているのみである。註－7

2）　久米廃寺

久米郡久米町大字宮尾字唐臼にわたって存している。吉井川の一支流久米川沿いの南面する緩斜面に立地し，古くから巨大な塔心礎があることなどで知られていたが，中国縦貫高速自動車道建設のため，1970（昭45）年から岡山県教育委員会が調査を実施し，塔・金堂などの主要建物群をはじめ，相輪などとともに，塑像物の破片，軒丸瓦3型式4種，軒平瓦4種類などが出土している。註－8

軒丸瓦1）Aは，複弁8弁蓮華文，1）Bは，1）Aと同文様であるが，内区中房の蓮子が1）Aが1＋5＋8であるのに対し，1）Bは1＋6＋8である。（外縁は両者共線鋸歯文である。）2）は，複弁7弁蓮華文で粗雑な造りのものである。蓮子は1＋8，外縁は平担な素縁である。3）は，単弁16弁，蓮子は1＋8，外縁は平担な素縁である。これは国府台寺（美作国府）出土のものとよく似ている。註－9　軒平瓦は全部報告されていないが，1）は無文で裏面に凸帯を持つもの。2）は三重弧文，3）は二重弧文の雑なつくりのもの。4）は扁行唐草文である。

以上のように久米廃寺の創建は，出土瓦から見て奈良時代前半期と考えられる。

3）　弓削廃寺

久米郡久米南町弓削泰西寺にあり，旭川の一小支流誕生寺川沿いの山合いの小盆地に存している。美作国府，国分僧寺，同尼寺の存する津山から備前に通じる街道沿いの南に18km程行ったところである。ちょうど，美作と備前との中間地点に位置している。現在寺院址は小学校などになり，周辺に礎石と考えられる石が残っている。戦後この小学校の体育館が建て変えられた時，多量の瓦類が出土し2種類の軒丸瓦が出土している。1）は単弁9弁蓮華文，外区に珠文を廻らしている。2）は単弁13弁蓮華文，外区に珠文を廻らしている。

これらの出土瓦から見る限り，弓削廃寺の創建は奈良時代後半期と考えられる。

4） 夜半廃寺

津山市（旧苫田郡）高野本郷に存し，加茂川の右岸台地上に位置している。高野本郷廃寺，高野寺とも呼ばれている。岡山県通史によれば，複弁9弁，蓮子は1＋7，外区は2本の圏線，外縁は平担な素縁である。美作国分寺出土ものと酷似しているが，それは複弁8弁のものである。[註－10]これらは奈良時代後半期に属するものであろう。

5） 江 見 廃 寺

英田郡作東町江見・藤生（ふじゅう）にあり，吉井川の一支流吉野川の西岸旧河道に接し，非常に不安定と思われる立地条件下であるにもかかわらず塔心礎と伝えられている礎石が残っている。また比高約１０ｍをはかる段丘上にも，瓦出土地があるが寺院址であるのか否か，確定しえない。中国縦貫自動車道の建設に伴なう高本遺跡の調査においては，奈良時代以降の建物群とともに，瓦類，鉄滓が多量に出土している。また，ちょうどこのあいだを県道バイパス工事が行われ１９７３年岡山県教育委員会によって調査が行われたが，[註－12]寺域想定範囲に比較して狭小な発掘調査であったため建物等は検出できなかった。多量の鉄滓などとともに出土した3種類の軒丸瓦について記述すれば次のとおりである。[註－11]

1）は，複弁7弁で，蓮子は1＋5＋8，外縁は線鋸歯文である。楢原廃寺出土の1），土居廃寺1）と同笵と考えられる。

2）は，複弁7弁で，蓮子は1＋(4)＋(8)，外縁は線鋸歯文である。竹田廃寺，大海廃寺1）と同笵と考えられる。

3）は，重弁8弁で，蓮子は1＋5，外縁は平担な素縁である。これは，平安時代に降るものと考えられる。

6） 竹田廃寺

英田郡作東町竹田才の堂にあり，吉野川に注ぐ山家川の上流約2.5㎞の所にあり，江見廃寺の東，土居廃寺の西にあたりちょうど両廃寺の中間点に位置している。国鉄姫新線が寺域と考えられる西側を南北につらぬいている。

一町四方と考えられる寺域内には，平瓦，丸瓦，須恵器，土師器，鉄滓などが散布し，かつ複複弁7弁蓮花文の軒丸瓦が一点採集されている。これは，複弁7弁蓮華文，蓮子は1＋(4)＋(8)，外縁は線鋸歯文である。江見廃寺2）と大海廃寺址出土の1）と同笵と考えられる。これらは共に奈良時代前半期に含まれると考えられる。

7） 土居廃寺

英田郡作東町土居御茶屋の元に在し，竹田廃寺のさらに東1.5㎞に位置し，美作の東端，播磨国境に存している。規模・建物の配置など不明であるが，旧土居小学校周辺から軒丸瓦2種，軒平瓦，鴟尾片が出土している。

軒丸瓦1）は，複弁7弁，蓮子は1＋5＋8，外縁は線鋸歯文である。これは，楢原廃寺1）B，江見廃寺と同笵と考えられる。2）は，複弁4弁と単弁1組を組み合せ，上部左側に蓮の花をかたどっている特異なものである。蓮子は1＋5，外縁は線鋸歯文である。軒平瓦は四重弧文で，裏面に3本の凸帯と櫛描波状文を施している。

8）　大海廃寺（吉野廃寺）

英田郡作東町山手に存し，吉井川の一支流，吉野川右岸段丘上に存している。この吉野川の上流8kmの地点には長大寺址が存し，下流8kmには江見廃寺が存している。

寺院の規模等については確認されていないが，中央に直径30cm程の円孔を持った1.5m×1.5mの塔心礎が，また周辺には礎石と思われる1m大の石が数ヶ，小字名に堂の下，金堂屋，門などの地名が残っている。これらを中心に1町四方の寺域が想定することができる。かって鴟飛片と二種類の軒丸瓦が知られている。

1）は，複弁7弁蓮華文．蓮子は1＋4＋(8)，外縁は線鋸歯文である。

2）は，単弁16弁，外区に珠文をめぐらしている。

軒平瓦は三～四重孤文と思われるものが一点出土している。1）は，江見廃寺2），竹田廃寺と同笵と考えられる。

9）　長大寺址（今岡廃寺）

英田郡大原町今岡長大寺にあり，吉野川の中流東岸段丘上にあり，美作地域では，最北端に位置し，東に2km程山越えすれば播磨国であり，北約12kmの志戸坂峠を越えれば因幡国に至る。

寺域は，ほぼ一町四方と考えられ，礎石を打ち割り近くの石垣などに転用されている。軒丸瓦

単弁8葉と思われる小破片と複弁8弁蓮華文軒丸瓦の二種が出土している。2）の蓮子は1＋7＋11，外縁は小形の鋸歯文である。軒平瓦は単純化された三重孤文様をもつものが一種出土している。

これらの他に，勝田郡勝央町平・勝間田から中国縦貫自動車道建設による平遺跡，あるいは圃場整備事業による勝間田遺跡から，礎石，巨大な堀り方を持つ2間×9間の建物址などが4棟が確認され[註－13]ている。この建物群に伴ない「郡」印の須恵器，緑釉，灰釉などとともに多量の瓦が出土しており[註－14]，これらを根拠として勝田郡衙と推定されている。5種類の軒丸瓦，1種類の軒平瓦が出土している。軒丸瓦1）～3）は，複弁7葉である。1）は少し大形で平遺跡からは1点のみであとは勝間田遺跡からである。蓮子は1＋8，外縁は平担な素縁である。3）は複弁のつくりが平担で厚みがない。蓮子が2）は1＋8，3）が1＋6である。4）は表面の剝離がいちじるしいが，複弁8葉と考えられる。蓮子は1＋8，外区に2重の圏線がめぐる。外縁は素縁であるが，鋸歯文がつくかも知れない。

5）は，単弁１１弁，蓮子は１＋６，外区に２重の圏線がめぐる。外縁は平担な素縁である。平遺跡では一番出土量が多い。

軒平瓦は，平城宮式瓦の６６６３型式と思われる破片が２点出土している。

また，少量ではあるが，久米郡衙と推定された宮尾遺跡からも小量の瓦が出土している。

そしてさらに，古瓦出土地点をひろいあげると，津山市（苫田郡）二宮大成遺跡[註－15]から中国縦貫自動車道建設による調査時に飛鳥様式の単弁８弁の軒丸瓦が単独で一点，英田郡英田町福本[註－16]から平瓦，丸瓦，円面硯，須恵器などとともに複弁６弁（復元推定）の軒丸瓦が一点，美作町湯の郷池[註－17]の内から複弁６弁の軒丸瓦が一点，などが知られている。

その他に奈良時代に含まれると考えられる平瓦，丸瓦などが単独で久米郡柵原町飲岡（ゆうか）[註－19]から出土しているが，遺構などについては明確でない。

以上のように美作地域において現在までに，平安時代以降に建立される寺院址を除いて１０個所が寺院址と考えられる。しかしまだこれらの中には，郡衙，駅屋あるいは窯址などが含まれる可能性があり，すべてが寺院址と断定しえないことはいうまでもない。これら寺院址と考えられるものの中で特徴的なことをあげるとすれば，第一にこれら寺院址の大多数が国分僧寺，同尼寺建立以前，よりさかのぼるとすれば美作分国以前に集中して建立されていると考えられることである。

第二に，弓削廃寺を除いて，出雲街道並びに因幡街道沿いに分布が集中している。弓削廃寺も，備前と結ぶ主要街道沿いに乗っていることも注目される。

第三に，西北限にある五反廃寺には，他に見られない特徴的な文様の軒丸瓦が見られること。

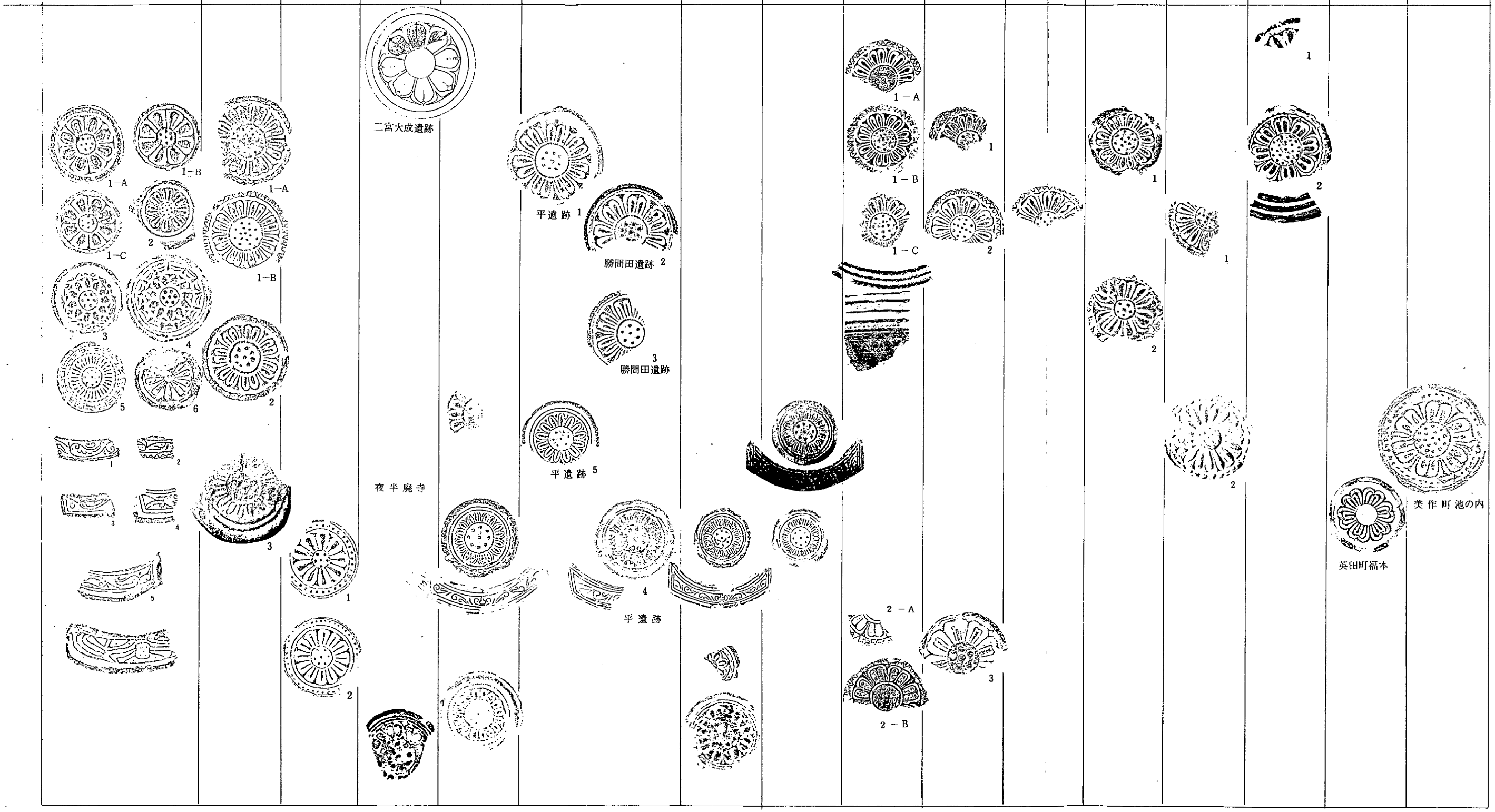
第四に，後の美作国の内でも特に英田郡内には１０ヶ寺の内，実に６ヶ寺が集中して存在するのに反し，勝田郡には，国分僧寺，同尼寺を除いて，また，苫田郡内には現在までの所，奈良時代後半期に含まれる夜半廃寺１ヶ寺の存在が知られているのみで，真島郡には寺院址の存在が知られておらず，偏在的な在り方を示している。

第五に，これらの中で楢原廃寺と江見廃寺，土居廃寺，また，江見廃寺，竹田廃寺，大海廃寺には同笵と思われる軒丸瓦が見られることなどである。

第六に，これらの中で，軒丸瓦は細い所ではちがいはあるけれども，複弁七弁蓮華文をもつものが多く存すること。

これらの寺院が建立された後，何年か経過したのち備前六郡が割かれて新国美作国が誕生するのである。分国美作が一国としての待遇を与えられ，苫田郡に国府が，勝田郡に国分僧寺，同尼寺がほとんど軌を一にして創建されるのである。

郡名	大庭	久米		苫田		勝田			英田							
寺院址	五反廃寺	久米廃寺	弓削廃寺		美作国府	勝田郡衙	美作国分僧寺	美作国分尼寺	楢原廃寺	江見廃寺	竹田廃寺	土居廃寺	大海廃寺	長大寺址		



3，　美作分国について－美作国の成立－

一つの国が分割され二国に設置しなおされる例は続日本紀などに，いわゆる分国記事として見い出されるが，その数はけっして多くない。

美作国もその数少ない分国の一つで，　丹波国から丹後国が，また日向国から大隅国が新たに設定される例などと軌を一にして，和銅６（７１３）年，備前国の六郡を割き新国として誕生した国である。しかしながら，それではなぜこの時期に分国記事が集中し，分国支配を実現しえたのかという問題については余り多く述べられていない。

備前国は一つの大国であり，それ以前の吉備は，紀記の雄略期に代表されるように，畿内勢力と相対して，幾多の反乱伝承を持つ地域で，備前国を分割することじたい中央の地方統治政策上大きな課題であったと考える。

先に述べたように，備前国北部，美作地方における寺院址は，非常に特殊な在り方を示している。そして，その後，続日本記の記載に従えば，和銅６年に美作国が成立することになるが，美作国府の創建をその出土瓦からみるかぎり，少なくとも天平１３（７４１）年の美作国分僧寺・同尼寺建立と同時期，すなわち諸国国分寺建立の詔勅以降と推考される。美作分国記事と国府創建の間には平城宮式瓦の上限が天平初めにさかのぼるとしても20年近くの空白が存在する事実を指摘できる。このことは，文献のうえからも暗示されるところで，註－20 最初の美作国司は，備前国の副官，つまり備前介上毛野堅身であった。彼は，註－21 備前守百済南典とともに分割を上申したという人物で，美作国に一年間着任している。その後，天平７年までの２０年間を津守連通が任官する。８～９世紀においては，他のほとんどの国司が２～４年，長くて６～８年の任期である史実と比較してその在任期間が非常に長いという特徴が注目される。これらの点を考えてみると，美作国の成立事情が若干なりとも明らかにならないであろうか。

美作国府から出土する瓦は，平城宮第２次内裏朝堂院に葺かれた，いわゆる平城宮式瓦に統一されていることである。そしてこれらの瓦（６２２５・６６６３系統）は，美作国分僧寺・同尼寺・勝田郡衙にも見い出される。

また一方で，美作国府址，美作国分僧寺址から出土している軒丸瓦の１種は，山陰・伯耆国分寺を中心に分布している。伯耆国分寺系統の瓦の出土は，伯耆国のみでなく，山陰諸国との関係も強いことを示している。註－22

美作国においては，平城宮式瓦そのものが，美作国府，美作国分僧寺・同尼寺，勝田郡衙などの官衙・官寺に直接的に入っている。それでは，これら平城宮式瓦の備前国，備中国での在り方はどうであろうか。

備前国において，平城京式瓦の出土する寺院址は，賞田廃寺址をはじめ１０ヶ所知られている。そして備前国においては，官寺には全く見られず私寺として断定しうる寺院址にのみ平城宮式瓦[註＝22]が見られ，美作国とはこの一点において様相を異にしている。また備中国においては，これまで吉備式瓦といわれるほど特徴のある華麗な重弁文瓦が白鳳期の各寺院址にみられるが，奈良時代後半期には平城宮式瓦６２２５，６６６３系統の亜型式に取って変わってしまう。その時期は，備前・美作両国より若干遅れるようである。[註－24]そして，備中国の在り方は，備前・美作とは少し異なり，官寺・私寺にもその平城宮式瓦の亜型式が見られることである。[註－25]

この中央律令政権による美作分割という一つの政治的手段が，より一層深く吉備内部に打ちこまれたくさびであることを物語っている。

強大な勢力を持っていた吉備国は，天武朝以降７Ｃ後半に備前・備中・備後に分割された。そして先に見てきたように，美作地方の寺院址の問題からみればすでに美作分国への手がかりがこの頃から打たれていることを物語っている。

備前国の北部あるいは，児島を備前国から切り離し，交通上の要所であり，軍事的にも重要な地点を中央の手に入れることは，中央為政者のこの時期だけの問題だけでなく古くからの願望であったことはすでに多くの先学の指摘する所である。単に分国が分割に終ることなく，播磨国から出雲・伯耆・因幡の山陰諸国ひいては大陸への一つのルートとして確保しなければならなかった要因である。[註－26]

他国の分割例，たとえば，陸奥国二郡を割き出羽国に隷しめたり日向国から大隅国が生まれてくる背景にはこの時期の新しい僻境地対策によるものと考えるが，備前国は一つの大国であり，先にも述べたが，失敗には終るが，畿内勢力に反抗することのできた数少い国の一つである。この国の分割は中央の統治政策上大きな課題であった。

過去においても，何回ともなく執拗に繰り返されてきた諸々の方法が，今回は，律令体制を維持・拡大するために仏教政策の中にそれを取りこみ，一つの収奪体系をつくりあげたと考えることができる。

4．　あとがき

美作地方の寺院址の概要を述べてきたのであるが，今ここで意識的に避けてきた問題がある。一つは白猪屯倉の問題である。白猪屯倉が，後期屯倉の一つとして史的意義付けについては多くのすぐれた論究がなされているとはいえ，[註－27]その比定地についての見解は，吉備五郡を固定的，限定的なものとみなしたうえで，白猪の屯倉を美作国内に，ひいては大庭臣との関係から，五反廃寺にあてる考え方がある。しかし，少くとも７世紀後半に建立されたと考えられる五反廃寺を６世紀代に遡のぼらせる考え方は当を得た見解とはなしがたい。しかし，今述べてきたように美作地方の寺院址は特殊な在り方を示してい

ることは明らかになった。しかしながら，今，白猪の屯倉の所在地について考古学的に証明する資料を持ち合わせているわけではない。

もう一点，八賀晋，高橋美久二両論文にいうところの「王申の乱」の論功行賞によって美濃国，あるいは山城国における寺院址に河原寺式系統の多いとする見解が，肯首されるとすれば，吉備国では王申の乱と深く関る河原寺系の寺院址との共伴関係はどうかという問題もある。文献学的には，吉備中枢部は近江方に組し乱後処理として吉備の分割を行ったという説もある。註－28

今後，美作分割がこのような状況の中でどういうふうに行われていくのか，吉備全域の分布状況を分析し，また古墳時代後半期の状況もふまえたうえで，美作地方におけるこれら河原寺式系統に含まれると思われるものを包括的に検討したいと考えている。註－29

最後に，この報告をまとめるにあたって，先輩，知人，友人から幾多の教示を得た。充分意をつくしているとはいえないが末筆ながら甚深の謝意を表したい。

註

註－1　播多廃寺では2基の瓦窯址が検出され，築窯において創建当初の瓦の使用，土師器，大菱叩目などから平安時代後葉という時期が与えられている。
出宮徳尚，根本　修　「播多廃寺発掘調査報告」岡山市教育委員会　1975－9

2　宗沢節夫「占見瓦窯址の発見について」「土」12号　金光図書館　1945

3　「英田郡史」　大正12年，椎口松玲　「英田郡史考」　昭和3年，他に「苫田郡史」　「久米郡史」などがある。

4－A　岡田博，井上弘　他，「美作国府」，「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」　6－中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査　3－岡山県教育委員会　1973，3

－B　栗野克己，山磨康平　他，「久米廃寺」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」4－中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査　2－岡山県教育委員会　1973，3

－C　江見廃寺は，県道バイパス工事により一部が1973年に調査が実施された（未報告）

註－5　－A　橋本惣司，岡田博，山磨康平，「宮尾遺跡」　「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」　4－中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査－岡山県教育委員会　1973

－B　田中満雄，井上弘，　「平遺跡」　「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」8－中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査　5－岡山県教育委員会　1975

－C　橋本惣司，井上弘，　「勝間田遺跡緊急発掘調査概要」　「岡山県埋蔵文化財報告」4－岡山県教育委員会　1974

6　松本和男，船津昭雄，「久世の夜明け」「久世町史」　久世町　1975

7　英賀廃寺からは，二子三類に併行する備中式の軒丸瓦が出土している。池畑耕一，葛原克人，　「二子御堂奥古窯址群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書」第2集一山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ（岡山以西），岡山県教育委員会－1972

8　註－4－Aに同じ。他に現地説明会のパンフレットなどがある。

9　国府台寺は，美作国府の中心部にあたり，国府台寺出土とされている出土遺物も美作国府関係のものと考えてさしつかえないと思われる。永山卯三郎「国府台寺」，「岡山県通史」1930

10　永山卯三郎　「高野廃寺」　同上，永山は，高野廃寺としているが，先の津山市史では夜半廃寺址としており，これに従った。

11　註－4－C，未報告資料であるが，調査を担当した河本清，岡田博，山磨康平の厚意により資料を使用させてもらった。

12　岡田博，山磨康平，「高木遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」　8－中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査　5－岡山県教育委員会　1975

13　註－5－Bに同じ。

14　註－5－Cに同じ。

15　註－5－Aに同じ。

16　泉本知秀，栗野克己，山磨康平，「二宮大成遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」　6－中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査　3－岡山県教育委員会，1973

17　英田郡英田町教育委員会保管資料による。

18－A　湯郷高校郷土史研究会　「湯郷池の内から布目瓦が出た」「私たちの考古学1号」

－B　近藤義郎，西川宏，「原始から古代へ－岡山県の考古学－」　岡山県図書館協会，1957，162頁に拓本が載せられている。

19　今井堯，「原始社会から古代国家の成立へ」「津山市史，第1巻　原始・古代」津山市　1972

註—20　横山活一，互楽善通，「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」「奈良国立文化財研究所年報，1965」奈良国立文化財研究所

森郁夫，「平城宮系軒瓦と国分寺造営」「古代研究３」,元興寺仏教民俗資料研究所 1974

21　三好基之，「律令時代」，「津山市史，第１巻，原始・古代」1972，美作国司の一覧表が記載されている。

22　佐藤興治・宮沢智士，「伯耆国分寺跡発掘調査報告」，倉吉市教育委員会，1971

「山陰の古瓦展」—パンフレット—倉吉博物館，1975

23－A　出宮徳尚　他，「賞田廃寺発掘調査報告」　岡山市教育委員会　1971

－B　玉井伊三郎編，「吉備古瓦図譜」　吉備考古会図譜刊行所，1941

－C　「特別展，岡山県の原始古代」—パンフレット—岡山県立博物館，1973

－D　江谷寛，「吉備国出土の古瓦」「古代文化，19－６」1967

註－１などにその紹介がある。

24　註－７，池畑・葛原報告に同じ。６２２５，６６６３系統の亜式の瓦は現在までの所，二子御堂奥古窯址で焼成されている。分布は国分寺，尼寺の軒平瓦をはじめ１１ヶ所知られている。

25　備中の６６２５，６６６３系統の瓦は，註－７の報告書でも少し述べているが，軒丸瓦についていえば，間弁が全体になく不規則である。また，備前・美作のものの外縁は鋸歯文であるが，備中のものは線鋸歯文になっていることなどにより，少し時期が降るであろうと考えた。

26－A　弥永貞三，「大化以前の大土地所有」「日本経済史大系，１」1956

－B　吉田晶，「日本古代国家成立史論－国造制を中心として－」1973

27　栄原永遠男，「白猪・児嶋屯倉に関する史料的検討」「日本史研究，160」１９７５に史料的検討を含め文献および考古からの諸説が整理，分析された結果，白猪屯倉と児島屯倉は同一の屯倉であるという興味深い論文である。

児島には奈良時代寺院址が存在しないことと含め，美作分割の時期と少し異るけれども，備前国から児島を割くことは繰り返すまでもないが，瀬戸内海航路の確保のみではなく，大陸航路につながっている。この児島の支配は，全島ででなくとも点的支配，すなわち港湾（停泊地）の確保でもよかったにもかかわらず屯倉を設定しているのである。生産性からいえば児島も美作地方も山間小盆地で余り高くない。しかし，児島には，塩生産が，美作地方には，鉄生産があることである。

註－28　－A　八賀晋，「寺方寺院の成立と歴史的背景」「考古学研究，77」　1973

　　－B　高橋美久二，「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」「史想，五」

29　中山薫，「吉備国と吉備大宰について」「続日本紀研究，１２７」，「備前・備中・美作三国の成立年代とその背景」「歴史地理，92－１」，「吉備白猪・児島屯倉設置の評価について」，「岡山史学，24号」などに「日本書紀」天武即位前，壬申記六月丙戌条の解釈からなされている。

↓

←

写真1　遠景（前の道路は中国縦貫自動車道）南から

←

写真　2　遠　景（南から）

写真－3　建物Ⅰ（建物Ⅱから）

写真－4　建　物Ⅰ

写真－5　建物Ⅰ礎石抜き取りあと

写真－6　建物Ⅰ礎石（東1トレンチ）

写真―8　建物Ⅰ（北，トレンチ）

写真―7　建物Ⅰおよび建物Ⅱ

写真－9　建物Ⅰ北側溝（北1トレンチ）

写真－10　建物Ⅱ北側溝上瓦だまり

写真—12　建物Ⅱから建物Ⅰを

写真—11　建物Ⅱ（北から）

写真－13　建物Ⅱ 基壇北側列石（西から）

写真－14　建物Ⅱ　北側基壇石列（東から）

写真－15　建物Ⅱ北側基壇石列（北から）

写真－16　建物Ⅱ　東側基壇石列および溝（東－2トレンチ）

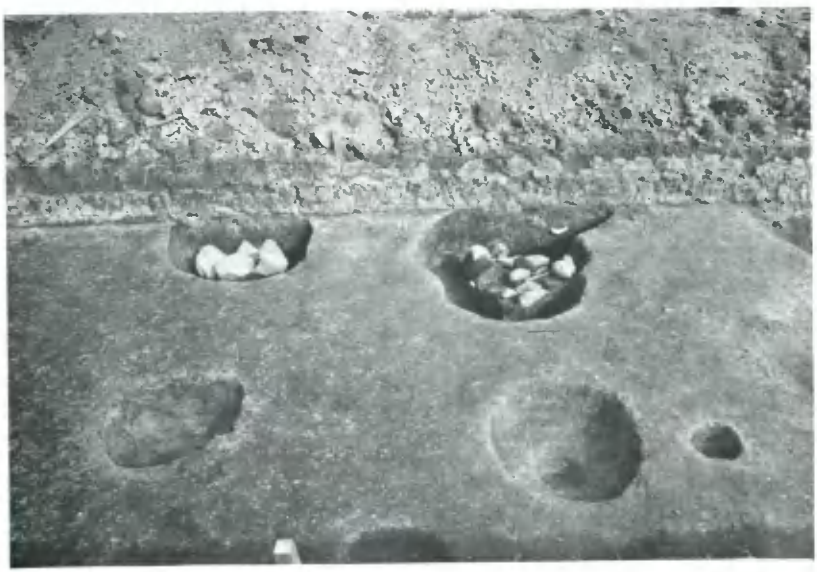
写真—18　建物Ⅱ　東側基壇石列および溝（西から）

写真—17　建物Ⅱ　東側基壇石列および溝（東2トレンチ）

写真－19　建物Ⅱ　東側基壇石列（南から）

写真－20　南－6トレンチ

写真－21　南6トレンチ　柱穴および溝（北から）



写真－22　南6トレンチ　柱穴（西から）

写真－23　西－3トレンチ　柱穴群（東から）

写真　24　西　13トレンチ　溝状遺構（西から）

写真—25　瓦窯址(1)

写真—26　瓦窯址(2)

写真—27　瓦窯址(3)

写真—28　瓦窯址(4)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (13)

楢原廃寺跡緊急発掘調査概報

1976年3月20日 印刷
1976年3月30日 発行

編 集 楢原廃寺跡発掘調査団

発 行 岡山県教育委員会

岡山市内山下2－4－6